

攻撃行動からの学びに関する検討：意図的な遂行からその結果までの振り返りを通して

池田，彩乃
九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻

<https://doi.org/10.15017/4777941>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 13, pp.25-31, 2022-03-22. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

攻撃行動からの学びに関する検討

—意図的な遂行からその結果までの振り返りを通して—

池田彩乃 九州大学大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻

要約

攻撃行動とは他者に危害を加えようとする意図的行動であり、さらに意図的、計画的に行われる能動的攻撃と怒りが抑えられず報復として行われる反応的攻撃に分類される。これまで攻撃行動を未然に防ぐべくその要因について様々な研究が行われてきた。しかし、攻撃性は自己の発達に必要不可欠なもので、人間が生き抜くための自我機能の一つとして肯定的に捉える必要がある。非行からの立ち直りにおいて内省が重要とされていることから、過去の攻撃行動について第三者に語り、振り返ることを通して内省し、学びを得ることで発達の・社会的に成長できるのではないかと考えた。そこで本研究では攻撃行動の後段階において自分の行動を振り返り、そこからの学びを質的研究により検討した。能動的攻撃をした人は内省が、反応的攻撃をした人は反省が見られ、それぞれ攻撃行動を振り返ることで学びを得ていた。能動的攻撃をした人が得た《自己確立》《他者受容》という学びは個人志向性・社会志向性というより適応的かつ成熟した状態につながるため、攻撃行動の種類によっては振り返ることで自己の発達に影響を与えうると言える。

キーワード：攻撃行動、内省、能動的攻撃、反応的攻撃

問題と目的

攻撃行動とは「他者に危害を加えようとする意図的行動」である(大淵, 1993)。攻撃行動は発達の過程で誰もが経験し得るが、中にはいじめや非行といった深刻な問題へ発展してしまう恐れもある。Dodge & Coie (1987) は、攻撃を「能動的攻撃 proactive aggression」と「反応的攻撃 reactive aggression」の2つのタイプに分けて捉えている。能動的攻撃とは、何かの目的を達成するための手段として、他者を支配したり、金品を得るために、時には仲間を使って意図的、計画的に行われたりする攻撃である。それに対して反応的攻撃は、仲間から挑発されたり、からかわれたりした結果、怒りが抑えられずに興奮して、報復として行われる攻撃である(濱口, 2001)。意図的、継続的に行われるいじめは、能動的攻撃と関連が深いと考えられる。

これまで攻撃行動を抑えるべくその要因や認知処理について様々な研究が行われてきた。大淵(2000)は、攻撃行動が生じる心理的な過程を攻撃性と定義したうえで、攻撃性に関する理論を、攻撃のための心的エネルギーが個体の中に存在していると考えられる内的衝動説、攻撃を不快な感情の発散とみなす情動発散説、攻撃が目的達成の手段として用いられる社会的機能説の3つの視点で論じている。非行、犯罪やいじめなどの問題行動のほとんどは攻撃性の歪んだ発動によるものであることから、攻撃的な人格、行動傾向は否定的に評価され、抑制されるべきものであるとみなされやすい(廣井, 2002)。

しかし、Elson, M. (1987) では、攻撃性は自己の発達に必要不可欠なもので、人間が生き抜くための重要な自我機能の1つとして肯定的に捉えなければならないことが強調されている。そこで、攻撃性によって生じる攻撃行動も自己の発達に影響を与え得ると考えられるため、未然に防ぐことも重要ではあるが、攻撃行動の後段階において自分の行動を振り返り、繰り返さないようにすることが大切なのではないかと考える。

攻撃行動と深い関連が見られるものとして、非行が挙げられる。廣井(2002)は、非行における凶悪事件、粗暴事件などの反社会的非行は他者に危害を及ぼす攻撃行動であり、自傷、薬物乱用などの非社会的非行は自分を傷つける攻撃であるとして

いる。非行においては、これまで非行からの立ち直り要因に関する研究が多く行われている。その中で、白倉(2011)は非行からの立ち直りの第一の要因として内省を挙げている。これによると、内省とはただ反省するだけではなく、行為をした自分自身に目を向けて、何が問題であったかを考えることである(白倉, 2011)。新明解国語辞典(2011)でも、反省は自分の今までの言動・あり方について、可否を考えてみるという意味である一方で、内省は自分の行動の跡や精神のあり方などを深く見つめるという意味であり、明確に区別されている。そこで、非行と近接する攻撃行動においても、非行と同じように内省が有効である可能性が考えられる。通常、内省は過去の言動を自分の中で、あるいは記述に起こしたり、第三者に語りたりすることで行われる。過去の攻撃行動について第三者に語り、振り返ることを通して内省し、学びを得ることで発達の・社会的に成長できるのではないかと考える。

そこで、本研究では攻撃行動をした経験のある人が攻撃行動の意図的な遂行から結果までを振り返る過程に注目し、そこからの学びを検討する。本研究では攻撃行動をした経験のある人の主観的な体験過程を追うために質的研究を行う。また、本研究では攻撃行動を大淵(1993)の「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義づける。これについては、相手が傷ついたかどうかではなく、自分に相手を傷つけようという意図があった行動を攻撃行動と捉えること、相手を傷つけようというほどの強い気持ちがなくても、殴る、蹴る、無視するといった明らかに攻撃的な行動を意図して選択した場合も攻撃行動と捉えることとした。

方法

1. 調査協力者

大学生と大学院生10名(男性5名、女性5名)に半構造化面接を行った。参加者は、知人への依頼または知人からの紹介によって募集した。募集する際に、自分が過去にした攻撃行動について調査すること及び攻撃行動の定義について簡単に説明し、同意を得られた調査協力者に対して面接を行った。

2. 半構造化面接の手続き

事前に作成したインタビューガイドに沿って半構造化面接を実施した。面接のはじめに、本調査で扱う攻撃行動の定義について説明を行った。

3. 半構造化面接の構成

面接における質問は大きく分けて以下の7つであった。各質問に対して参加調査者には口頭による回答を求めた。

①いつ、どのような関係の相手に攻撃行動をしたか 攻撃行動をした時期と相手との関係について尋ねた。また、攻撃行動をした相手との当時の親しさについて1～10の10段階で調査協力者の主観による回答を求めた。1が「全く親しくない」、10が「とても親しい」であった。さらに、攻撃行動の詳細を尋ねた。

②攻撃行動をした経緯について ①で答えた攻撃行動をした経緯について尋ねた。ここでは、状況的なきっかけと調査協力者がどういう思いで攻撃行動に至ったかという意図性について注目した。

③攻撃行動をした後について 攻撃行動をした後にどのような気持ちになったか、また、自分がした攻撃行動によって状況が変化したかについて尋ねた。ここでの状況の変化とは、その場の変化だけでなくその後の対象者との関係の変化や第三者による介入や影響があったかなど、様々なことを指している。

④自分がした攻撃行動について 自分が攻撃行動をしようと思ってから実際にした後までの一連の出来事について、当時考えたことを尋ねた。また、①～③までの質問で振り返り、今考えたことについて尋ねた。さらに、相手の気持ちについて考えたことについても当時と今で区別して尋ねた。

⑤また同じ状況になった時どうするか もし、攻撃行動をした時と同じような状況あるいはきっかけが生じた時、次はどのように感じ、どういった意図を持ってどのような行動をとるのかについて尋ねた。また、意図や行動についてはなぜそのような意図を持つのか、なぜそのような行動をとるのかという理由についても尋ねた。

⑥他に思い出せる攻撃行動 他に思い出せる攻撃行動があるか尋ねた。「ある」と回答した場合、その攻撃行動について、もう一度①～⑤までの質問を行なった。

⑦インタビュー全体を通して感じたこと 面接全体を通して感じたことを尋ねた。

4. 倫理的配慮

調査への協力を依頼する際に、調査の内容について簡単な説明を提示した。その中で、インタビューを対面で行うための新型コロナウイルスの感染対策について、当日のマスク着用の呼びかけ、インタビューは調査者と調査協力者が2m以上の距離をとって行うこと、インタビューを行う部屋は30分に一度数分間の換気を行うこと、インタビュー前日に調査者の一週間の体調記録を提示することを明記した。

インタビューを行う前に、インタビューで話す内容を全て録音すること、調査で得られたデータは全て個人が特定されない形で公表すること、調査への参加は自由意志であり、また、参加を決めた後でも、いつでも調査への参加を止めることができること、調査協力者の希望により研究中の情報は全て削除・破棄できることについて説明を行った。その上で、調査への参加の同意を書面で求めた。同意が得られた調査協力者にインタビューを行った。本研究計画ならびに上記、倫理的配慮につい

て広島大学大学院人間社会科学部教育学系プログラム倫理審査合同委員会の審議を受け、実施の承認を受けた（承認番号20200075）。

5. 分析方法

インタビューで得られた回答は全て逐語化し、木下（2003）の「修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTA）」を用いて分析を行った。木下（2003）によると、M-GTAは社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れた理論であり、さらに、研究対象とする現象がプロセス的性格を持つ研究に適しているとされている。攻撃行動は他者との相互作用の中で生じる行動であり、攻撃行動を振り返るプロセスとそこからの学びについて検討することを目的とする本研究の分析にはM-GTAが適していると考えた。まず最初に取り上げた事例はベース・データの中で、分析テーマに照らしてディテールが豊富で多様な具体例がありそうな調査協力者のものであった。分析を行った調査協力者の順にaからアルファベットを振り分けた。複数の事例について語った場合は、語りの順に1、2と番号を振った。aのデータについての概念生成が終了すると、次の調査協力者のデータについての概念生成を行った。生成された概念を確認しつつ、新たな概念を生成していった。全ての事例について概念の生成が終了すると、次は、生成された概念間の関係を元にカテゴリーを作成した。さらに、カテゴリー間の関係を検討し、結果図を作成した。

結果と考察

1. 分析対象者の攻撃行動の概要

攻撃行動の概要から本研究の定義に当てはまらないと判断した事例を分析から除き、全13事例を分析の対象とした。分析対象者がいつ、どのような関係でどの程度の親しさの相手に、どのようなきっかけや意図があつて攻撃行動をしたのかという質問に対する回答の概要を表1に示す。

2. 攻撃行動の振り返りを通して学びに至るカテゴリー

攻撃行動をした経緯についての質問で得られた調査協力者の意図性をもとに、攻撃行動を能動的攻撃と反動的攻撃の2種類に分けて結果と考察を行った。「攻撃行動をした後のことについて」、「自分がした攻撃行動について」、「また同じ状況になった時どうするか」という3つの質問項目の回答から、攻撃行動の種類別に概念とカテゴリーを生成した。最終的に、能動的攻撃をした人については27の概念と10の下位カテゴリーが、反動的攻撃をした人については18の概念と4の下位カテゴリーが生成された。また、共通して5のカテゴリーが生成された。なお、概念を〈〉、下位カテゴリーを《》、カテゴリーを【】で示す。

3. 学びに至るまでのプロセスの検討

能動的攻撃をした人も反動的攻撃をした人もカテゴリー間の流れは共通であった。調査協力者は、【攻撃行動後の気持ち】と【状況の変化】について思い出すように教示された。次に、攻撃行動をしたときに振り返ったこととして、【当時の振り返り】について話した。その後、これまでの面接での質問を通して過去の攻撃行動について現在の時点での振り返りを行った。これが【今の振り返り】である。最後に、攻撃行動をした時と同じような状況に再びなった場合、次はどんな行動を取ると考えるか、また、そう考える理由を【攻撃行動からの学び】とした。能動的攻撃をした人と反動的攻撃をした人のそれぞれの流れや特徴

表1 分析対象者の攻撃行動の概要

協力者	年齢	性別	攻撃行動	いつ	相手との関係	親しさ	意図
a-1	21	女性	無視	中学生	部活の同級生	5, 6	相手が部活の練習に真面目に参加しないことへのストレス、理解できなさ。
a-2			無視	小学生	クラスの友達	7, 8	グループ内での無視。リーダー的存在の子が怖くて従った。
b	23	男性	タックル	大学3年生	部活のチームメイト	2	チームメイトが全力で練習してないと感じ、もっと強くなってほしいという思い。
c-1	21	女性	無視	小学生	弟	3	弟に何を言っても口喧嘩になるため、腹が立ち、もう喋ってやるもんかという思い。
c-2			蹴る	中学か高校	弟	6, 7	自分の足で寝ていた弟に触られた気持ち悪さと、起こされたことへの腹立たしさ。
d	21	女性	避ける	小学5, 6年頃	クラスメイト	3	仲のいい友達に合わせて、遊び半分でクラスメイトの子の気持ち悪いと避けるように。
e-1	23	女性	無視	高校2, 3年頃	父親	3	触れてほしくないことを言うてくる父親が嫌で、嫌な気持ちを伝える手段として無視
e-2			無視	高校3年間	母親	6	喧嘩するとお互いに無視。自分は悪くない、怒っているということを伝える手段として無視
f	19	男性	叩く	小学生	弟	10	弟が悪いのに自分が親に怒られたため、むしゃくしゃして弟を叩いた。
g	23	男性	殴る	小学生	弟	7	ゲームの取り合いで喧嘩し、互いに叩き合っていた中でカットとなって強めに殴った。
h	23	男性	突き飛ばす	中学生	中学校の友達	5	友達に対して傷つけることを言っていて、注意したら突っかかってきたため自分を守るために突き飛ばした。
i-1	21	女性	悪口	大学3年生	同じバイトの人	4	職員の人にキツク言っているのを聞き、怒り感情になり、その後バイト仲間とその人の悪口を言った
i-2			叩く	小学生	妹	8	喧嘩の中でお互いに叩き合っていた。その時はムカつくって感じ。

を以下に述べる。

能動的攻撃をした人の学びに至るまでのプロセス 能動的攻撃をした人の学びに至るまでのプロセスの結果図を図1に示した。能動的攻撃をした人は、〈悪いことをしているという認識〉を持ちながらも〈自分の行動に対する正当化〉、明確な目的を持って攻撃行動をした場合にはその攻撃行動で変化があるかという〈攻撃行動に対する結果への不安〉、怒り感情を収めるために攻撃行動をしたが〈怒りが収まらない〉、〈遊びのつもり〉と、【攻撃行動後の気持ち】は様々であった。【状況の変化】としては、攻撃行動をした相手が周囲から孤立または自分自身が周囲から浮いてしまう〈関係の悪化〉や、目的を持って攻撃行動をしたが目的が達成されない〈攻撃行動から良い結果を得られなかった〉など、状況が〈悪化〉した人もいれば、〈変化なし〉という人もいた。また、当時の担任の先生が攻撃行動に気づき、叱られたという事例もあった（〈第三者による介入〉）。ここでは遊びのつもりで攻撃行動をしていたが、先生に叱られたことで自分の行動が相手を深く傷つけたという認識が持てたと話した。その後の【当時の振り返り】でも、先生に叱られたことによる〈第三者の介入による気づき〉が得られていた。第三者からの介入がなくても、攻撃行動をした相手や周囲の人たちに申し訳なさを感じ、〈後悔と反省〉を抱いている人もおり、《自発的な内省》がされていた。一方で、悪いことという認識はありながらも、相手が悪いと思う、周りに合わせないといけないからしようがないと思うなど、自分の攻撃行動を〈悪いことをしていると思いつつ正当化〉している人や、〈相手の気持ちを考えられない〉人など、《攻撃行動をした時と同じ感覚》で止まっている人もいた。そもそも〈攻撃行動そのものに対する振り返りなし〉という人もいた。その後の【今の振り返り】では、怖い存在の人に従ってしまいがち、苛立った状態だと頭ごなしに話してしまう、負けず嫌い、自分の気持ちに気づくことやそれを相手に伝えることが苦手といったように自分自身の性格について〈自己理解〉していたり、当時の自分が子供だったと感じた、

バカなことをしたと思う、当時の自分が嫌という気持ちを伝えるにはその攻撃行動しかとれなかったのだと思うといったように〈当時の自分の拙さを認識〉していたり、《意識が自分に向いている》振り返りがあった。また、当時の振り返りでは相手の気持ちを考えなかった人でも、〈今は相手の気持ちを想像できる〉ようになって相手を傷つけたと思ったり、相手の性格を認められるようになった、相手は傷つけようと思って嫌なことを言っているわけではない、相手がどんなことで怒るのかわかってきたといったように相手の性格に対する理解である〈他者理解〉をしたり、《意識が相手に向いている》振り返りもあった。他にも、【当時の振り返り】では後悔と反省をしていた人が、【今の振り返り】では、時間が経って改めて振り返ってみると自分はそんなに悪くなかったと〈客観視〉している人もみられた。また、【今の振り返り】段階でも相手の気持ちをあまり考えられないという人もいた。最後の【攻撃行動からの学び】では、怖い存在に従ってしまいがちと〈自己理解〉をしていた人が次は〈周りに流されずに判断する〉と考えていたり、友達に流されてなんとなく攻撃行動をした人が次は〈友達関係は重視しつつも、攻撃行動はしない〉と考えていたり、自分で判断しようという思いや、自分の芯のようなものを作る思いなど《自己確立》の学びを得ている人がいた。また、話を聞いてみてどう思っているのか〈相手を理解しようとする気持ち〉や、仮に違う考え方で向き合ってみて〈相手と歩み寄る姿勢〉など、《他者受容》の学びを得ている人もいた。【今の振り返り】の段階で〈他者理解〉をした人は、そこから《他者受容》という学びを得ていた。これは、相手の性格を理解できているからこそ、相手を受け入れようという気持ちが生じるのではないかと考えられる。【今の振り返り】で〈今は相手の気持ちを想像〉でき、〈相手を理解しようとする気持ち〉という学びを得た人は、自分の攻撃行動で相手を傷つけたとわかっているからこそ、次は相手を傷つけないように相手の考えや気持ちを理解したいと思っていると考えられる。【今の振り返り】で〈当時の自分の拙さを認

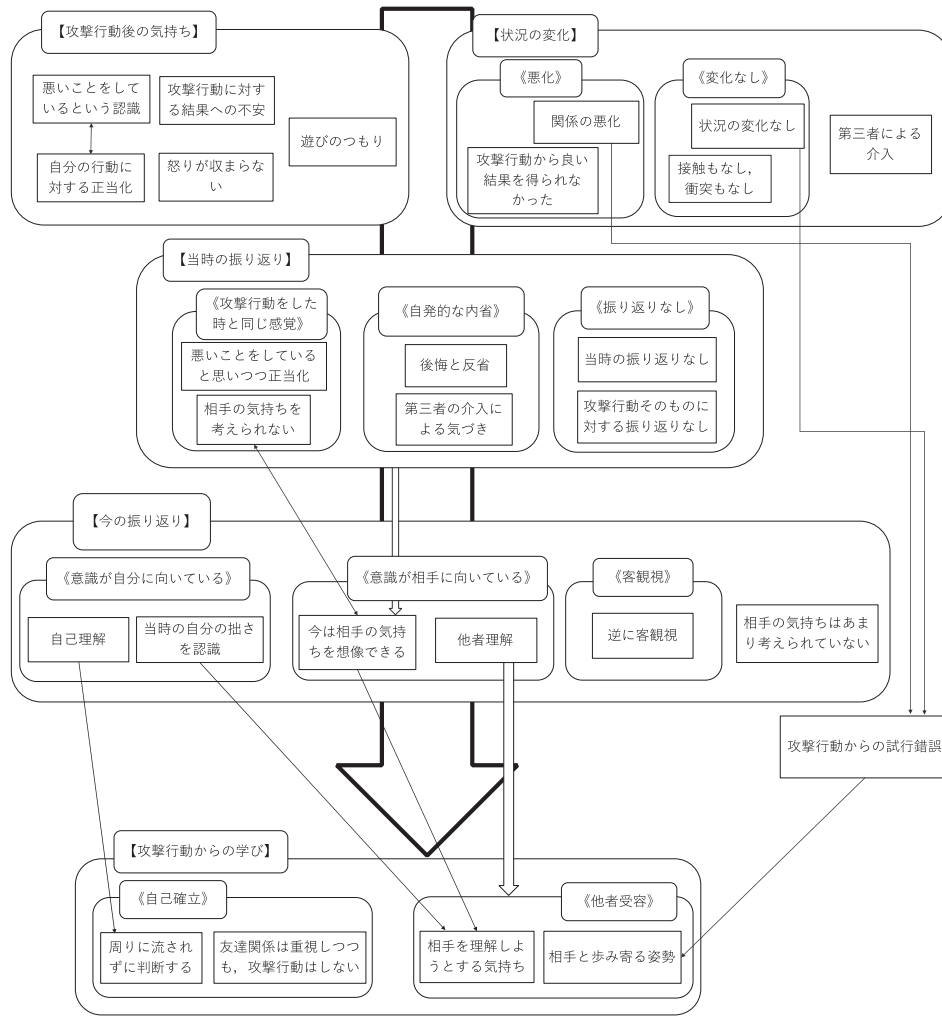


図1 能動的攻撃をした人の学びに至るまでのプロセス

識)した人も、(相手を理解しようとする気持ち)という学びを得ている。これは、当時の自分が相手のことを考えずに自分本位で攻撃行動という手段をとったことに後悔しているからこそ、次は相手のことを考えたい、理解したいという気持ちになったのではないだろうか。【状況の変化】において(関係の悪化)や(状況の変化なし)だった人は、その結果を受け(攻撃行動からの試行錯誤)がみられた。攻撃行動をしてもうまくいかなかった、あるいは何も変わらなかったから次は違う手段を取ろうという意味で(相手と歩み寄る姿勢)という学びを得たと考えられる。この人たちには、相手を理解できない、あるいは理解したくないという思いがみられた。攻撃行動の相手との親しさが10段階のうちの半分にも満たないことが原因の1つとして考えられる。このことから、相手を理解しようという気持ちではなく、理解できないけど、攻撃行動をした時よりも(相手と歩み寄る姿勢)を持ちたいという学びを得たのではないかと考えられる。

このように能動的攻撃をした人は、【攻撃行動後の気持ち】や【状況の変化】は様々であり、【当時の振り返り】でも《自発的な内省》ができていない人もいれば、《攻撃行動をした時と同じ感覚》にとどまっている人や《振り返りなし》という人もいた。しかし、面接の中で攻撃行動について振り返り、【今の振り返り】では自分や相手に意識を向け、内省できている人がほとん

どであった。そして【攻撃行動からの学び】では全員が《自己確立》と《他者受容》のいずれかもしくは両方の学びを得ていた。学びに至るまでのプロセスはそれぞれであったが、最終的に共通した学びを得たと考えられる。

反動的攻撃をした人の学びに至るまでのプロセス 反動的攻撃をした人の学びに至るまでのプロセスの結果図を図2に示した。反動的攻撃をした人は、攻撃行動をした瞬間にハッとして「やってしまった」と(瞬間的な冷静さと反省)、攻撃に対してもともとマイナスなイメージを持っていた人は攻撃をした(自分に対する嫌悪感)、攻撃行動をしたがイライラやモヤモヤが発散されず(怒りが収まらない)など、【攻撃行動後の気持ち】は様々であった。【状況の変化】では、ほとんどの人が(状況の変化なし)であった。1人だけ攻撃行動をしたところを親に見られて怒られたため(攻撃行動から良い結果を得られなかった)。【当時の振り返り】では、当時に攻撃行動を振り返り、(後悔と反省)をした人がいたが、(当時の振り返りなし)、(相手の気持ちを考えない)というように攻撃行動について《考えない》人がほとんどであった。【今の振り返り】では、能動的攻撃をした人と同じように、当時は(後悔や反省)をしていた人が、時間が経ったことによって《客観視》できるようになり、お互いに非があった、お互い子供だったと(お互い様感)を感じていた。また、今振り返ってみても、特に何も感じず(今の振り返

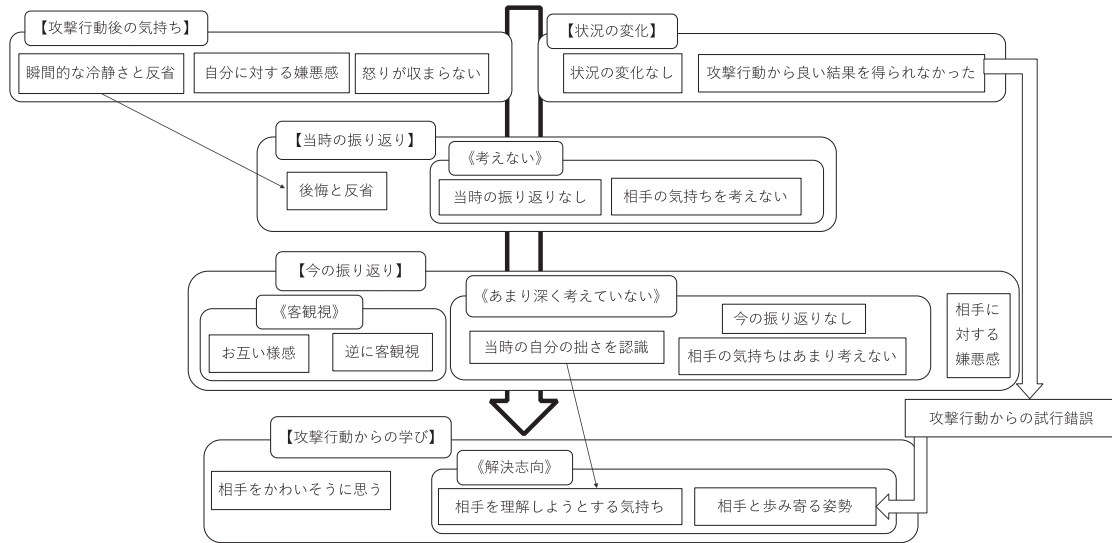


図2 反応的攻撃をした人の学びに至るまでのプロセス

りなし」という人や、自らの攻撃行動や相手の気持ちについて《あまり深く考えていない》人が多かった。攻撃行動をした自分について子供だったと思うと〈当時の自分の拙さを認識〉している人もいたが、あくまで認識にとどまり内省は見られなかったため《あまり深く考えていない》と思われる。一方で、攻撃行動をした〈相手に対する嫌悪感〉を抱き、今でもその相手の気持ちは分かりたくないという人もいた。【攻撃行動からの学び】では、【攻撃行動後の気持ち】で〈瞬間的な冷静さと反省〉、【当時の振り返り】で〈後悔と反省〉をしていた人は、〈相手がかわいそうに思う〉から、次は攻撃行動をしないと語った。また、相手がどう考えているか聞いてみる、お互いが納得できるように話すなど、〈相手を理解しようとする気持ち〉や、言葉でちゃんと伝え合おうとする〈相手と歩み寄る姿勢〉という学びが得られた。この2つの学びは【状況の変化】において〈状況の変化なし〉、〈攻撃行動から良い結果を得られなかった〉人が、〈攻撃行動からの試行錯誤〉を通して、次は攻撃するのではなくて話し合いお互い納得する形で解決しようという意図によるものであった。このことから、〈相手を理解しようとする気持ち〉と〈相手と歩み寄る姿勢〉は《解決志向》の学びであると考えられる。

このように、反応的攻撃をした人も【攻撃行動後の気持ち】は様々であるが、【状況の変化】は〈状況の変化なし〉がほとんどであった。【当時の振り返り】でも【今の振り返り】でも自らの攻撃行動に対して内省が行われていないことが特徴的であった。また、【攻撃行動からの学び】では《解決志向》という学びを得ている人が多かった。これは攻撃行動がプラスに働かなかったことに対する試行錯誤と、攻撃行動をしたこと自体を一般的な視点から悪いことであると認識しているため次は攻撃をせずに解決しようという表れだと捉えられる。いずれも攻撃行動に対する善悪の判断や反省でとどまっており、内省的ではない。

4. 能動的攻撃をした人と反応的攻撃をした人とのプロセスおよびそこから学びの比較

能動的攻撃をした人と反応的攻撃をした人の学びに至るプロセスの違いや、【攻撃行動からの学び】に着目して結果を解釈する。

能動的攻撃をした人と反応的攻撃をした人における【攻撃行動からの学び】で、〈相手を理解しようとする気持ち〉、〈相手と歩み寄る姿勢〉という概念が共通して存在する。しかし、この概念をまとめた下位カテゴリーの名称は能動的攻撃をした人の場合は《他者受容》、反応的攻撃をした人の場合は《解決志向》と異なる。これについて、能動的攻撃をした人は【今の振り返り】における〈当時の自分の拙さを認識〉、〈今は相手の気持ちを想像できる〉、〈他者理解〉が〈相手を理解しようとする気持ち〉、〈相手と歩み寄る姿勢〉という学びにつながっている。これは、相手と自分が違う考え方をしていると理解していたり、分かり合えないと思ったりしているが、それを受け入れられずに攻撃行動をした過去の自分に対して後悔しているからこそ、次は相手を尊重しようという他者に対する受容的な態度が現れている。一方で、反応的攻撃をした人は【今の振り返り】における〈当時の自分の拙さを認識〉、〈攻撃行動からの試行錯誤〉が〈相手を理解しようとする気持ち〉、〈相手と歩み寄る姿勢〉という学びにつながっている。反応的攻撃をした人の〈当時の自分の拙さを認識〉では攻撃行動そのものに対する反省のみで内省に至っていないこと、攻撃行動がプラスに働かなかったという結果から次は攻撃行動をしないようにしようという意味での〈相手を理解しようとする気持ち〉、〈相手と歩み寄る姿勢〉という《解決志向》の学びを得ていた。《解決志向》の学びは、「話し合えば分かり合える」、「話し合えば解決できる」というような短絡的な考えであるとも言える。相手と自分は違う考え方をしているが相手のことを尊重したいと考える能動的攻撃をした人の方がより深い学びを得ていると考えられる。

能動的攻撃をした人は【今の振り返り】において内省ができていた人がほとんどであったが、反応的攻撃をした人は反省でとどまっており、内省はできていなかった。これについて、能動的攻撃は一時的な感情による攻撃行動ではなく意図性・計画性を持って行われる攻撃行動であることから、「なぜ攻撃行動をしたのか」、「なぜそのような意図を持ったのか」など振り返る要素が多く、内省に結びつきやすいのではないかと考えられる。これに対し反応的攻撃は一時的な感情をコントロールできずに行われる攻撃行動であることから、振り返る要素が少な

く、「悪いことをした」という反省にとどまってしまうのではないかと考えられる。

5. 「振り返る」ことの意味

本調査では、面接の最後に「インタビュー全体を通して何か感じたことがあれば教えてください」と質問した。この質問に対して、普段は自分がした攻撃行動について振り返らない人が多く、話すことに抵抗を感じた人が一定数いたが振り返ることで改めて思い直すことがあったり、変わろうとしている自分に気づいたり、振り返ることに何かしらの意味を感じている人が多数であった。この結果から、普段自分がした攻撃行動について振り返る人は少ないが、これは機会がないだけであり、振り返る場が設けられた場合には反省や内省が得られそこからの学びが促進されることが考えられる。

総合考察

1. 振り返ることの重要性

本研究の目的は、攻撃行動をした経験のある人が攻撃行動の意図的な遂行から結果までを振り返る過程に注目し、そこからの学びを検討することであった。M-GTAによる分析の結果、振り返る過程は様々であったが、どのような攻撃行動をしても振り返りを行なうことによって何かしらの学びを得ていることが明らかになった。

能動的攻撃をした人は、面接時に内省的な振り返りが見られ、《自己確立》、《他者受容》といった学びを得ていた。一方、反動的攻撃をした人は面接時に反省的な振り返りが見られ、主に《解決志向》という学びを得ていた。そして、能動的攻撃をした人も反動的攻撃をした人も攻撃行動からの学びを得た上で、次は攻撃行動を繰り返さないようにすると答えた。このことから攻撃行動については、反省あるいは内省することが攻撃行動を繰り返さない要因になるのではないかと考えられる。振り返りによって初めて「気づき」が得られたように振り返る機会、あるいは振り返るために語る機会があることが重要であると考えられる。

2. 攻撃行動からの学びが自己の発達に与える影響

本研究で能動的攻撃について振り返った人は、《自己確立》、《他者受容》という学びを得ている。アイデンティティ形成に重要な機能を果たす概念として、「自己受容」と「他者受容」がある(上村, 2007)。「自己受容」とは自己の感情や衝動を受け入れることであり、本研究で生成された《自己確立》と同義ではないが、自分自身に対する理解があるという点で共通する。「自己受容」ができることは、自己の内的基準を志向し自分自身を活かした個性的で主体的な生き方につながる。「他者受容」は、自分とは異なる考えを持つ他者を受け入れることであり本研究で生成された《他者受容》と同じ意味を持つ。この「他者受容」ができることで、他者との共存や社会適応を志向することに繋

がると考えられる。そして「自己受容」は自分自身の内的基準を志向する個人志向性に、「他者受容」は他者や社会との調和を志向する社会志向性につながるものとして位置付けられる(上村, 2007)。この個人志向性・社会志向性のバランスが健康発達のプロセスには不可欠とされていることから、「自己受容」と「他者受容」がともに高く、バランスよく共存している人が、より適応的かつ成熟した状態にあると考えられる(上村, 2007)。

このように、能動的攻撃について振り返った人が内省によって得られた《自己確立》、《他者受容》という学びは個人志向性・社会志向性というより適応的かつ成熟した状態につながるため、攻撃行動の種類によっては振り返ることで自己の発達に影響を与える可能性があると考えられる。ただし、本研究では1人の調査協力者から語られた攻撃行動のエピソードは多くて2つであったため、能動的攻撃を振り返ることで得た学びが自己の発達に影響を与えるかどうかについては、より多くのエピソードから論じる必要があるだろう。

〈付記〉

本稿は、広島大学教育学部第五類心理学系コースに提出した卒業論文の一部に修正を加えたものです。卒業論文の執筆にあたりご指導していただいた広島大学大学院人間社会科学部研究科服巻豊先生をはじめ、アドバイスをしてくださった研究室の皆様、本紀要への投稿を勧めてくださった九州大学大学院人間環境学府金子周平先生に心よりお礼申し上げます。

文献

- 上村 有平 (2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連. 発達心理学研究, 18, 132-138.
- Elson, M. (1987). *The Kohut Seminars on Self Psychology and Psychotherapy with Adolescents and Young Adults*. W.W. Norton & Company. (伊藤藍 (訳) 1989 コフォート自己心理学セミナー. 金剛出版)
- 大淵 憲一 (1993). 人を傷つける心——攻撃性の社会心理学——. セレクション社会心理学, 9, サイエンス社出版.
- 大淵 憲一 (2000). 攻撃と暴力——なぜ人は傷つけるのか——. 丸善ライブラリー出版, pp. 6-12.
- 木下 康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.
- 白倉 憲二 (2011). 非行少年の立ち直りを促進する要因についての探索的研究. 帝京大学心理学紀要, 15, 11-25.
- Dodge, K.A., & Coie, J.D. (1987). Social-information-processing factors in reactive and Proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and social psychology*, 53, 1146-1158.
- 濱口 佳和 (2001). 子どもと攻撃行動——社会的情報処理の視点から——. 杉原一昭 (監修) 発達心理学の最前線. 教育出版, pp. 162-171.
- 廣井 亮一 (2002). 子どもの攻撃性に関する一考察——少年非行の現状を通して——. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 12, 137-149.
- 山田 忠雄他編 (2011). 新明解国語辞典 第七版. 三省堂出版.

A Study of Learning from Aggressive Behavior
—Through reflection on the process from intentional execution to its outcome—

Ayano IKEDA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Aggressive behavior is a deliberate attempt to harm others, and is further classified into active aggression, which is intentional and planned, and reactive aggression, which is done in retaliation for uncontrolled anger. Various studies have been conducted on the factors that contribute to the prevention of aggressive behavior. However, aggression is essential for the development of the self and should be viewed positively as one of the ego functions that enable human beings to survive. Since self-reflection is considered to be important in recovering from delinquency, we hypothesized that children can grow developmentally and socially through self-reflection and learning by talking about and reflecting on their past aggressive behavior with a third party. In the present study, we conducted a qualitative study to examine the learning from looking back at one's own behavior in the later stages of aggressive behavior. Those who engaged in active aggression showed introspection, while those who engaged in reactive aggression showed reflection, indicating that they learned by reflecting on their aggression. The learnings of "self-establishment" and "acceptance of others" obtained by active aggressors lead to a more adaptive and mature state of individual and social orientation, and therefore, depending on the type of aggressive behavior, looking back can influence the development of the self.

Keywords: aggressive behavior, introspection, proactive aggression, reactive aggression